

---

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

ミケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！  
に転生だ

### 【Nコード】

N0406Y

### 【作者名】

ミケ

### 【あらすじ】

死んだ(消滅) 幼女 ネギまに転生 化け猫無双の話です。  
文才もこの先の展開もまったく無いのに、ノリと勢いで書いてしまった作品です。

誰か助けてorz

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1) (前書き)

初投稿です。

駄文です。

見切り発車です。

文才皆無です。

ですが、後悔はしていない。キリッ

## 第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)

目が覚めると、そこはたらいの中だった。

「(これは『なかなか良いたらい(木製)』だな)」

「(……………」

「(……………」

「(ふう)」

そろそろ現実を見ようか(お前にたらい(木製)の何がわかるんだ？というツッコミはなしで)

「(どうしてこうなった!)」

いや、焦るんじゃない。

まず今の状況を整理して、冷静に対応するんだ!!

Q 俺の名前は?

A ーただ今名無しです

Q 年齢は?

A ー一応転生直後だから0歳のはず

Q 今の状態は?

A どこからどう見ても仔猫です

Q とりあえず何故仔猫？

A ……少し心当たりがありますが今はどうでも良いです

Q 今の状況は？

A たらい（木製）の上のにゃんこ状態で川を流れてます

Q 泳げますか？

A 仔猫なので溺れます

Q この状況で冷静になれますか？

A 無理です 誰か助けて下さい

Q 誰のせいですか？

A 確実にあいつのせいです（怒）

Q 今、一番やりたいことは？

A この状況から抜け出してあいつにO・H・A・N・A・S・H・I・した  
いです

まあ何故こんなことになったか考えてみるか、うすうす気が付いて  
はいるんだが……

それは遡ること数時間前

「知らない天井だ」

なぜか言わなければいけない気がした。後悔はしていない！

ん？何か電波が入った気がするが気にしない

「ここはどこだ？」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

土下座している幼女（さらさらの金髪）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「……………」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

ものっつっすごく土下座している幼女( )ぷるぷる震えている( )

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「……………」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

ものっつっつっつっつすぐく土下座している幼女（上目遣い＋涙目でちらちら見てる）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「（これはアレなのかっ！？アレしかないのかっ！？）」

今俺の目の前には、

1 真っ白な空間

2 テンプレ幼女による土下座

フム、この二つの状況から導き出される答えは

「よろしい、ならば転生だ！！」

「ふうえっ？！（ビクッ！）う、うえええええええええええんんんんんんんん！！！！（いきなりの大声に驚き、涙を流して逃げる幼女）」



ト

ピンポーン

幼女を落ち着かせるまでお待ちください

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)(後書き)

同日に編集って・・・

ごめんなさい!!

第零話 よろしい、ならば死に際だ（前書き）

今回は、短いです。

## 第零話 よろしい、ならば死に際だ

さらに遡ること数時間前

俺、桐谷悠樹きしやぶしゅうは悩んでいた。それは、今週末の義妹の誕生日プレゼントを買ったためだ。

俺の家族は、父、義母、義妹、俺、の四人家族だ。

母親は体が弱かったため、俺が3歳のときに病気で亡くなった。

そして、俺が小学校に入学したころ父親が今の義母と再婚した。

義母には俺と一つ違いの「香織かおり」という娘がいた。だが、再婚して間もなく両親の仕事が忙しくなり、香織の面倒は俺がみるが多くなっていた。

自慢じゃないが香織はかわいい。きれいな黒髪、白い肌、可愛らしい瞳、ピンク色の唇。(イメージとしては某友人が少なさそうな人の集まりの戦国武将の名前の女の子を黒髪にした感じ)  
そして、幼いころいつも自分の後を付いてきて楽しそうに笑う義妹のことを本当の妹のように可愛がってきた。

そんな大切な妹のために、バイトの給料一か月分(今月は5万)を

持ってプレゼントを買いに来たわけだが

「——良い物が見つからない——」

どれだけ探しても『これだっ!!』というものが見つからないため学校が終わってから二時間ほど雑貨屋やアクセサリーショップを彷徨っていた。

「（そろそろかえらなきゃいけないか）」

日が傾き始めそろそろ帰ろうかななどと考えながアクセサリー店を出て歩いていると、ふと近くにあった雑貨店が目をついた。

ガラス越しに見えたものに視線が止まる

「（おおっ！これはなかなかいいな）」

自分の中で『これだっ!!』という感覚があり、迷わずそれを手に取った。

いい物を買ったとご機嫌な帰り道  
財布の中身がほぼ無くなり明日の昼飯をどうしようかと考えながら  
歩いていると、少し先に香織の姿が見えたので買ったアクセサリー  
を隠した後、驚かせてやるつと後ろからゆっくり近づいてポンツと  
両肩に触れた瞬間

意識が白に覆われた

第零話 よろしい、ならば死に際だ（後書き）

今日中にもう一話いきたいです

同日に改定中

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2) (前書き)

幼女の話し方え

完成度が低いミケを許してください



## 第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2)

少し熱くなっただけの幼女を怯えさせてしまった。

その後、幼女を落ち着かせるのが大変だった。

落ち着かせるために頭を撫でたらものすごく懐かれた。(金色の髪の間、猫の耳が見えた)

とても可愛かったのもっと撫でてくを披露したらものすごいことになった。(想像にお任せしますby作者)

ピンポーン 幼女が落ち着いたので説明してもらっています。

「簡単にまとめると、

1 幼女は神様である

2 私生活や仕事のストレスから酒を飲みまくって酔っ払った(神様はエターナルロリータです)

3 そのまま寝てしまい風邪引いた

4 それでも仕事はやってくる

5 がんばったが、失敗した

6 俺の存在が消滅

7 魂回収+土下座

8 説明中 今ここ

というわけだな」

幼「は、はいそうなんですぅ／＼。クチユンッ!

もどそうとしたけど手遅れでどうにもならなくてえクチユンッ!

それであなたあ・・・桐谷悠樹きじやゆうという存在を消してしまいましたあ  
クチュンッ!」

お前のせいかと思うと怒りが沸いてくるが、これだけ申し訳なくされ  
ると怒ることもできない。

そして雰囲気が妹に似ている。

俺はまだ高一で、まだまだたくさんやりたいことがあった。

俺は彼女も欲しかったし、マンガやラノベの新刊も読んでいないし  
大切な義妹の誕生日プレゼントも渡せていない。

「存在が消滅って言うのはどんな意味なんだ?」

幼「あなたがいたと事実がなくなってえ、いなかったことになりま  
すう、ほんとうにごめんなさいい(涙)クチュンッ!」

「—————そうか」

「(死んで悲しまれるよりは存在が消えてしまったことが救いな  
のかもしれないな)」

幼「あのうゝ考え事しているところ申し訳ないのですがあ、今後の

ことでお話があるのですがあ。クチュンツ！」

すっかり忘れられていた神様（幼）

幼「ん〜？なにか馬鹿にされたような気がしますけどあ、今はいいですう。クチュンツ！たぶん判っているとは思いますがあ、元のセカイの輪廻の輪から排除されてしまったあなたは元のセカイに戻ることはできないのでえ

- 1 別のセカイにトリップ
  - 2 別のセカイに転生
  - 3 ちよつと強引に神格化して部下に／／／（ポツ）
  - 4 。（絶対にさせませんが）消滅
- の4つから選んでもらいますう。クチュンツ！」

ふむ、4は勿論なし、3は大変そうだから嫌、2か1だな。  
とゆつか3はどうやるんだ？

「3はどうやるんだ？」

「それはあ／／／簡単ですけど言いにくいのでえ．．．  
実際にやりますかあ／／／」

---

かみさまのターン

かみさま（ほしよくしゃ）のどうこうがたてにわれている。  
ゆうきはていそうのききをかんじた。こうかはばつぐんだ!!

ゆうきのターン

ゆうきはごういんにはなしをもどした。

ゆうきはにげきった!

---

「どんな世界に行くんだ？」

これは大切なことだ。心構えがあるかないかではだいぶ違う。決して逃げたわけではないんだっつ!

幼「むう、ざんねんですう（ボソツ）。なら、1か2ですねえ。クチユンツ! 逝ってもらうセカイは私が管理しているセカイになりますからあ

1、弾の リア

2、魔法先生ネギま!

3、イスクール・オブ・ザ・ツド

4、PSYRN

の4つのセカイのどれかですねえ。クチユンツ!

はいアウトオオオオオオオオオオ!!!  
普通の世界でいいのにヤヴァイフラグがいつぱいだああああ!!!  
特に3は悪意しか感じられない)

「3と4はなしで、あんなに危ない世界には逝きたくない!となる  
と1か2だが、ネギまのほうが好きだからネギまに転生させてくれ」

アンチするかは気分と立場しだいだな

幼「ネギまのセカイですねえ。クチュンツ!転生すると元の名前は  
忘れてしまいますう。本当は記憶も消えるんですけどおサービスで  
すう。それと特別に名前をぶれんとしますう(最初のプレゼント  
が名前ノノノ)あとは、お詫びにいくつか願い事を叶えますから何  
がいいですかあ?クチュンツ!ちよつと無茶なことでもいいんです  
よノノノ」

「(ゾクツ)・・・なら、家族が幸せに暮らせるようにしてくれ。  
あと義妹に俺が買ったプレゼントを渡してくれ。あとは気と魔力を  
無限にして、身体はできるだけハイスペックにしてくれ」

幼「能力とかはいいんですかあ?いろいろ付けますよう?クチュン  
ツ!」

これはもう決めてある

「そうだな。あらゆる効果を付与した魔道具を無から創造できる能力『魔具創造』の能力をくれないか」

幼「いいですよ〜いろいろいじって死……なないようにいろいろ強化しておきますう。クチュンツ！もういいんですかあ？クチュンツ！」

「ああ、なら送ってくれ」

幼「わかりましたあ、でもその前におねがいしていいですかあ？クチュンツ！」

「ん、なんだ？」

幼「実は私には名前がないんですう。クチュンツ！あなたに付けてもらいたいんですけどお良いですかあ？／＼クチュンツ！」

「それぐらいならいくらでもいいぞんてどうだ？」

そうだなあ、アルスな

アルス「アルスですかあ／＼／＼ではあなたには  
——  
と言う名前を送りましょう。クチュンツ！私から送られる名前な  
ので私という神との縁が深くなりますよう。それではいってらっ  
しゃい。死んだら私のところに来る様にしましたけど（ボソツ）」

「えっ、な」

彼の身体が光りだして一瞬の後消えた

アルス「じゃあ、サクサク書き換えましょう。クチュンツ！」

アルス（幼女）は書類になにかを書き込み始めた

アルス「なんだか気分が良いですねえ。クチュンツ！ふわふわし  
ますう。クチュンツ！」

だがアルス（風邪）は気づかない。自分が思っていた以上に風邪が  
酷かったことに。

だから、あんな悲劇が起こってしまい慌てているいろ付け加えたの  
はまた別の話。

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2) (後書き)

神様(幼女)の名前はギリシャ神話の月の女神アルテミスからとりました。

同日改定



## 主人公設定 + アルスの失敗（前書き）

やっと主人公設定

後悔は、していないっ！キリッ

## 主人公設定+アルスの失敗

### 主人公設定

旧名 桐谷悠樹 (きりや ゆうき)

新名

性別 男

年齢 0歳 (16歳)

種族 ????

容姿 人VER 十人中八人がかっこいいと言う容姿 (BLACK CATのトレイン「ハートネット」 肉体変化によって20歳頃まで変更可能)

猫VER 黒猫

性格 優しい 無口だが心の中ではしっかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感

能力値 (Fate風) 「」は猫時

筋力 A - 「B -」

耐久 C + 「C -」

敏捷 A 「S -」

魔力 EX

気 EX

幸運 S (アルスの加護)

能力

名称 魔具創造 (アイテムメーカー)

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともEXなので気にせず使えるが、一回の使用にこの



能力値 (F a t e 風)

筋力 神様だもん

耐久 神様だもん

敏捷 神様だもん

魔力 神様だもん

気 神様だもん

幸運 神様だもん

能力

名称 神様だもん

能力 戦うときには諦める

ナニこれ理不尽 by「徹夜明けのハイテンションでやっちゃった」  
と語る容疑者<sup>ミケ</sup>

アルスSIDE

神が存在する場所と人間が存在する場所では時間の流れが異なる。  
神は大量の仕事をゆつくりとした時間の流れの中でこなしていく。  
(それでも仕事が多くてストレスが溜まるが)

アルス「あれえ？これはどうゆうことでしょお？（汗）」

そのため、それに気づいたときには風邪が治っておりすぐに自分が失敗したことに気がついた。

アルス「決して撫でられたのが気持ちよかったとかあ、自分の好きなタイプだったとか考えていたわけじゃあないんですからねえ」。勘違いしないでくださいよう」

決してツンデレでもどうしようもないため、神は彼のために書類に手を加え彼に手紙を送った。

アルスSIDEEND

## 主人公設定 + アルスの失敗（後書き）

名前とアーティファクトが未定な件について  
申し訳なく思っています。

ヒロインどうしよう（汗）  
アンケートをとりたい、、、

### 第3話 よろしい、ならば確認だ(前書き)

どうにか名前は決まりましたが

アーティファクト、ヒロインと問題は山積みです。

こんな粗末なものでいいならどうぞ

### 第3話 よろしい、ならば確認だ

— SIDE

我輩は仔猫である。名前はまだない。

違うんです。言ってみたかったただけなんです。ほんの出来心と徹夜明けのテンションのせいなのです。だからモノを投げつけないでください。ほんとにゴメンナサイ。調子に乗りました、スミマセンデシタ。

……電波を受信していたみたいですね。もう大丈夫です。進めましょう。

さて未だに流れ続けている私ですが何もできないので、この『なかなか良いたらい（木製）』のなかでゆっくりくりくつろいでいました。だってどれだけ強くても祿に制御できない仔猫ですよ？身動きが取れません。しかもこの『なかなか良いたらい（木製）』のサイズは



仔猫三匹分といったところでしょうか、ものすごくくつるげますし落ち着きます。一人猫鍋状態です。

口調が少し変わっている気もしますが転生の影響でしょう。そこま  
で気にしません。それより此処がどこかと何故こうなったかが気  
になります。

そこでふと何か違和感を感じ（転生してから感覚が鋭くなったよう  
で）、『なかなか良いらしい』の底を見ると

文字が浮き出ていました。ちゃんと文字が消えるのか心配です。

「こんにちはあ、アルスですう。少し失敗しましたあ ごめん  
なさいですう。

ナニを間違えたかというと種族ですう。本当は人間としていても  
らう予定でしたがあ、私がいろいろ弄ったのでセカイに人として認  
識されなくてエラーが出てしまい今の状態（私と同じ猫状態）と言  
うわけなんですう。

修正はしたのもう大丈夫ですからあ思う存分生きてくださいい。

私はここで待ってますよう（行っちゃうかもしれないが）。あと  
お、そこは並列セカイなのでえ原作ブレイクしてもかまいませんか  
らあ。今は大戦の十年前のイギリスの田舎ですからあ。それに十  
年間も修行する時間がありますからがんばってくださいねえ

それではあ、能力情報、種族名（私がつけましたあ）、あなたの名  
前（これも私がつけましたよう）、そのほかのいろいろな情報を送  
りますからねえ、普通なら廃人確定ですが安心してくださいい決し  
て痛くしませんし廃人になんてなりませんからあ。

まあ少しチクリとするかもしれないませんが それくらいは大丈夫で  
すよねえ じゃあいきますよう」

数秒後、頭の中に異物が入り込むような感覚があり、鈍い痛みの後  
に一気にたくさんの情報が入り込んできた。

だがそれも数秒で終わり、まだ違和感と気持ち悪いが今の状況を理  
解した。

まずは自分の名前のこと。これは、神様からもらった名前のほうで  
自分の名前は自分で思い出すことができせん。そして、私が神様  
から貰った名前は『リゲル』そして種族は・・・『古猫<sup>こねこ</sup>』？ よ  
くわかりませんが単純に霊格の高い猫つまり猫族の上位種でしょう。  
その霊格はかの龍樹や真祖の吸血鬼と同格かそれ以上らしいです・  
・

何だかヤツちまった感がすごいですね。しかもこれ不老不死じゃな  
いですか？

少し試してみましようか・・・

---

リゲルSIDE

少しやりすぎちゃったりゲルです。なにぶん初めてだったものですから加減が難しく、魔力と気が放出してしまい、それが混ざり合い・

周りが爆発しました。そのおかげで、岸まで着きましたが周りはぼろぼろです。

ん？私ですか？すぐに回復しましたよ。もうすでに人外ですからこの程度じゃ痛くも痒くもありませんね。ですが、冷静に考えればわかることなので少し焦り過ぎてしまっていたようです。

そんなことよりすごいのがこの『なかなか良かったらい（木製）』です。傷ひとつついていません！この『なかなか良かったらい（木製）』は実に良いパートナーになりそうです。

さて、陸にも付けたので早速能力の確認をしましょう。まずは、人型になれるかどうかですね。

身体に流れる力を徐々に人の形に変化させていく、そして力の濃度を上げていき最後に身体を力に重ねるようにイメージすると一瞬の発光の後に、元の自分を成長させたような感じになりました。

少し身長が伸びてますね175cmくらいでしょうか。まあ、それはとりあえず後でいいです。まずは周りの修復の魔具を造らないといけません。

創造したものはただのバット（木製）。能力のイメージは某天、ちやんが使っているアレです。なんだかこれを持つとフルスイングしなくなりませぬ。

では、気を取り直して元の状態にもどれと念じながら魔力をこめ、手首を使って軽くまわします。

「あの独特のフレーズが流れる」

うん、どうにかなるものですね、ただのバットに周囲のものの時間を巻戻すという概念を貼り付けたようなものなので、魔力消費が半端じゃありませんがどうか使えます。

でもこれは完成度が低いですね。無駄が多すぎて能力を引き出しきれません。なのですぐに破棄しました（大量の魔力を流し込めば耐え切れずに塵になるんです）

いろいろ試して慣れていくために修行しないとイケませぬ、ならばアレ（・・・）を造ってみましょうか。

そうですね！修行と言ったらダイオラマ魔法球です！！今回造ったのは1時間を5日にする物です。超強力です。魔力が無限にあるからこそできる荒業です。この中で魔道具製作を極めてあの計画を実行するのですー！

エターナルロリータ保護計画をー！！

つと、人がこっちに向かって来ているようですね。早く此処を離れ  
ましょうか。

### 第3話 よろしい、ならば確認だ（後書き）

後書き

すぐにわかると思いますが、造る物はカシオペアですね。

無限の魔力と10年×365日×24時間×5日＝438000日

1200年ありますからどうにかかりますよね（汗）

修行の基本は、魔力と気の効率化です。

ジ・エンド  
完成があればすぐにできると思っていますので

次回はキングダムゾンします。

最後にヒロインとアーティファクト案を募集します。

誰か、意見をください

#### 第4話 よろしい、ならば計画準備だ（前書き）

修行回です。とはいっても完成があるのでサクサクいきます。 戦闘

描写はありませんが近いうちに入れる予定です。

駄文なので修正が入るかもしれませんがとりあえず投稿です。

#### 第4話 よろしい、ならば計画準備だ

リゲルSIDE

まずは、エターナルロリータ保護計画の説明をしよう。

この計画は時間跳躍の魔道具を造りエヴァが吸血鬼化した直後に保護し、自衛できる程度の魔法を教えようと言う計画である。

この計画は魔法の師であり恩人という立場につけ、正義の魔法使いからエヴァ自身を護ることができるといっすばらしい計画だ」どこいきやがった!」・・・すばらさ「まだ近くにいるはずだぞ捜すんだ!」・・・計画であ」みつけたぞっ!」・・・)

グスッ)

「そこにいるぞ!捕まえる!」

「何だこの猫は?魔獣なのか?」

「これだけ魔力を持った猫なんてこの世界にいるはずないだろ!」

「おいっ!そっちにいったぞ!」

「任せろ!」



「ハアハア・・・もふもふ・・・ふわふわ・・・ジュルリ」

ただ今、正義の魔法使いに追われております。そして最後のやつが怖い（ガクブル） 何か大切なものを失いそうな気がする。少し危機感（貞操の）を覚えながら猫特有の動きで回避し続ける。さて、何故こんな事になったのかというと・・・

服を着ていないため猫になって逃走

魔力が少しもれてて見つかる

正義の魔法使いたちが魔力を持った猫⇨魔獣⇨悪と判断して問答無用で捕獲しようとしてくる

逃走中 今ここ

という訳で追われているのです。

「おいつ！ちゃんと捕まえろ！」

「お前こそしつかり追い込めよ！」

「お前らバカだな」

「何だとっ！」

「魔法使えばいいだけだろうがっ！ 『風の精霊11人。縛鎖となつて敵を獲れえろ！ 魔法の射手・戒めの風矢』」

やっと魔法を使ってきました。今すぐにも逃げる事はできませんがチャンスですから視ておきくべきです。

「チツ！はずしたか。」

「しっかり狙えよ！」

「（フツ）下手だな」

「なんだとっ！」

「なんだ？戦るのか？」

「本当の魔法の使い方を見せてやろう！」

「上等だ戦ってやろうじゃねえか！」

「（フツ）格の違いを思い知るが良い！」

.....

その後、見つからないように隠れながら正義の魔法使いの魔法を視て「魔法の射手」などの魔法を完成させました。あの後正義の魔法使いの皆さんは仲間割れでぼろぼろになりながら帰って行きました。そして私はというと・・・

「『魔法の射手 速弾・氷の17矢』」

トーン！

魔具で認識阻害と人払いの結界を張り、魔法発動媒体として短めの

杖を造りだして魔法の練習中です。魔法を覚えなくても魔具を使えばいいのだけなのですが、使える手札カードが多いに越したことはありませんし、エヴァに教えるつもりならば自分がその魔法を理解していなければなりません。なので実際に使ってみているわけなのですが、少し問題がありまして・・・

「使える魔法が少ないですね。」

その問題とは、見た魔法が圧倒的に少ないということです。さすがに正義の魔法使いさん達も仲間割れでは強力な呪文を使っているんですけど（使えなかつただけかもしれないが）。

見たは完成のおかげで十全以上に使いこなすことができますが、視ていない魔法はどうしようもありません。ですから今使える魔法は

- 1 魔法の射手
- 2 武装解除
- 3 治療
- 4 認識障害
- 5 障壁

の5つしかありません。なので今の私の攻撃方法は魔法の射手だけなのです。教えることもできませんし魔法だけでは自分の身も守れません。（魔力でゴリ押しすれば話は別ですが）

ですから今は魔法の修行に専念します。計画を後回しです！まずは魔法世界に行ってみましょうか………

---

---

---

キングクリムゾン！！

---

---

あれから3年が経ちました

私は魔具をいくつか使って魔法世界に渡り、様々な魔法を視てきました。あれからやったことといえば  
旅費を稼ぐために剣闘大会に参加して対戦相手の技を本人以上に使いこなすプライドをへし折ったり、とある国の魔法庫に侵入しありとあらゆる魔法書を読破したり、紛争地帯に近い村を巡り治療して

回ったり、紛争で身寄りのいない孤児達を村に連れてきたり、そこを襲撃してきた（自称）正義の魔法使いを殲滅したりしてました。最初は殲滅することに抵抗がありましたが、奴らがやっている犯罪の数々を知ってからは情け容赦なく一人も残さず処分しました。あいつらは嫌いです！

おかげで正義の魔法使いからは『ダークイレイザー黒の抹殺者』、『ヘルキマット死を運ぶ黒猫』、『サイレントフェイス無音の掃除屋』、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』と呼ばれ、紛争地帯の村では『ヒーラー癒し手』、『もふもふ様』と呼ばれていた。（この頃ネコ派が圧倒的に増えた）

十分なほど技を磨いた私は、計画を実行するために魔具を造り始めた・・・

**第4話 よろしい、ならば計画準備だ（後書き）**

どうだったでしょうか？

あまり文才がないので雑な話ですみません。

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

次回、エヴァとの邂逅です。

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1) (前書き)

読み直しては改定を続けています。

一話につき数回は改定しているという衝撃の事実……  
はぁ……

エヴァの過去を書いてみましたがおリジナルです。

グロイです。苦手な人にはお勧めできません。

シリアスも入ってます。



## 第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1)

リゲルSIDE

ふうやつと完成しました。これこそ私が造った時間跳躍魔具、その名も『ベテルギウス』。これは使用者の魔力を大量に吸い取りますが、簡単に時間や場所を指定できるといふ素晴らしいものです。・・・えっっでもエヴァンジェリンのいる場所が分からないから駄目だろっ？と云いましたか？

心配には及びません。こんなこともあろうかと造っておいたのがこの古めかしい「長杖」その名も『導きの長杖』ガイダンスといい、その効果は某便利な未来のロボット猫のとある道具の数倍以上の効果です。これで大体の方向がわかるのでその方向へ行けばいいだけです。我ながら素晴らしいものを造ったと自負しています。

これで安心して計画を実行できます。一応切り札も造っておいたのでもし戦闘になっても負けるはずがありません。それでは、

『ベテルギウス待機状態スタンバイ 設定開始プログラミングスター 座標指定ポイントセット「イングランド」  
タイムセット  
時間指定「600年前」 設定終了プログラミングエンド 待機状態解除スタンバイリリース 起動まで(力  
ウントダウン) 5, 4, 3, 2, 1, 0 ベテルギウス始動しま  
す』

それでは目的を果たしにいきましょうか……………

---

## エヴァンジェリンSIDE

私はここで死ぬのだと思った。体のいたる所に傷があり、血が付いている。今は亡きアイツにかけられた呪いでこの体になってからは傷がすぐに治るのだが、この一週間休む間もなく襲撃してくる人たちによって身も心も限界だ。

目の前には光のようなものを飛ばして攻撃してくる杖を持ったたくさんの人たちがいる。私は逃げようとするが体が全く動かない。そして私は近づいてくる光の束を見ながら目を閉じた……

## 十数年前

私はとある国の辺境伯の娘だった。両親と我が家につかえている執事やメイドさんたちと一緒に幸せに暮らしていた。毎日が楽しくて、優しい人たちに囲まれて私は幼いながらに自分が幸せなのだと感じていた。だが、私の10歳の誕生日にすべてが変わった。

その日はみんな舞踏会の準備に忙しくて私は一人ぼっちだった。私の誕生会の準備の為なのだということもわかっていたし、我儘を言つて私の為に準備してくれている人たちや心から祝福してくれている人たちに迷惑をかけたくなかった私は自分の部屋ベットのの上でお人形遊びをしていた。

そして、遊んでいるうちにいつのまにか寝てしまったみたいで、起きたらもう外が暗くなっていた。もう舞踏会が始まっていてもおかしくない時間なのに誰も呼びに来ていないことを不思議に思いながら私は急いで部屋を出た。

既に、舞踏会が行われているはずだから急いで大広間に向かった。

使用人の人たちとすれ違わないことに少し不安を感じながら大広間の扉に手をかける。扉が厚くて聞こえないが、中は少し騒がしいようだ。多分私が未だに来ていないことのせいなのだと思います、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら扉を開けたと同時に中から叫び声が聞こえた。

そこには地獄が広がっていた

「いやあああああ――――――――――！！」

「痛いっ！痛いようっ！」

「誰か助けてくれ！まだじにだくない」

「あしっ！わだじのあしが無いの！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこには、血まみれになった人、足のない人、内臓が出ている人、すでに息絶えた人たちがいた。

私は一瞬で何が起こっているかわからなくなり何もしゃべることができなかつた。だから一人のヒトが近づいて来ていることに気がつかなかつた。

「ごきげんようお嬢さん。君が今夜の主役かい？」

話しかけられた瞬間、私の周りの時間が止まった気がした。すぐそこには全身黒い服を着た若い紳士のような恰好をした人がいる。

一目見ただけで気づく強烈な違和感、原因は一両手に持っている血まみれのナイフ。

それは、この惨状を起こしたのは自分であると宣言していることと同義である。私の体が震えだす。生まれて初めて感じる死の恐怖が体を支配する。逃げたいと思うが逃げられないことは確実だ、なぜならすでに私の目の前に彼はいるのだから。

「余興は気に入ってくれたかい？少しでも楽しんでくれたなら満足だよ。」

私は彼の言っていることが理解できなかった。この惨状を余興といった彼のことも理解できるはずがなかった。

「エヴァ！はやく逃げるんだ！」

「はやくその男から離れなさい！」

そこに両親の声が聞こえた。無事であったことを喜びながらそちらに向くが、次の瞬間っ！

「今は僕が彼女と話しているんだ。邪魔しないでくれないかい？」

ズシュッ！

嫌な音が聞こえたと同時に、胸からナイフの柄を生やした両親が仰向けに倒れた。

「あっ、えっ？」

目の前の光景が理解できない。両親の胸から血がどんどん出ていて、うめき声をあげている。このままでは両親が死んでしまうという事実が理解が追いつかない。

「こんなまったく面白くない田舎に立ち寄ったら、ここの領主の娘が誕生会を開くと言ったから見に来たのさ。馬車を襲って入ってきたのはいいけど、主役がいなかったから適当に話を合わせながらその辺の豚と話してたけど自慢ばかりで面白くないし、かといって雌豚どもは臭い香水の匂いをさせながら色目使って来るからつい苛々して殺しちゃった？」

でもそのおかげで君の素敵な表情も見れたからあいづらにも感謝しないといけないね。それはさておき、キヨウはキミの誕生日だねだから君に素敵なプレゼントをあげよう。これは僕がいつか不老不死になるための研究してきたことによつてできたモノ。不完全だけど不老不死と強大なチカラを与え、その身を闇に落とす『呪い』。その実験台第一号の称号を君にあげよう」

彼が何かを唱え始めるが、私はそれを聞いてはいない。目の前の両親を見続ける。

「くチカラ汝にそのチカラを与えん。ふう、じゃああげるよ。この呪いチカラを……」

突然目の前が真っ黒になる。そして体の中のナニカが変わっていき熱いものが注がれる感覚して身を裂かれるような激痛が走る。やつと痛みが去り目が見えるようになる。目の前には両親を傷つけ、大切な人たちを殺したヤツがいた。その瞬間、私は感じるがままにチカラを振るう

「おまえがつ！おまえがあ~~~~~！！」

私の右手が彼の胸に突き刺さる。

「ごふっ！なんだこの力は！？吸血鬼にただけのはずなのに！こんな力があるはずがない！こんなことはあり得ない！僕が死ぬなんてことあるはずg~~~~~！！」

ヤツは声にならない叫び声を出しながら燃え始めた。その炎は黒く、周りに燃え広がってゆくが私は急いで両親の元に駆け寄る。

「とうさま！かあさま！」

両親を呼びながら肩を揺らす・・・だが両親はすでに息を引き取っていた。

その夜、一人の少女の慟哭が燃える屋敷の中に響き渡った・・・

エヴァンジェリンのSIDE

いつまでたつても痛みがこないことに気がつく。目を開けて確認しようとする、頭上から声が聞こえてきた。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛らしいお嬢さん？」

そこには、黒い髪をした男の人が立っていた。その人を見た瞬間、「トクンッ」と胸が高鳴った気がした……



**第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1) (後書き)**

更新がきついです。

内容は変えませんが後で改定します。

評価、感想、ヒロイン、アーティファクト案待ってます!!

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2) (前書き)

明日は休みだからストックを貯めておきたいです。

2話更新できたらいいな・・・

## 第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2)

リゲルSIDE

ベテルギウスを使って時間跳躍した私が一番初めに見たものは数人の魔法使いから放たれたであろうたくさんの『魔法の射手』でした。たった三年でしたが密度の濃い生活（逆恨みされてよく襲撃されていました）をしてきた私は一瞬で気持ちを切り替え、すぐさま周囲を確認し、私の魔法発動媒体である指輪をつけます。目の前には複数の魔法使い達があり、『魔法の射手』を放っています。その狙いの先には小さな金髪の少女が傷だらけで倒れています。私はすぐさま無詠唱で『多重超高密度魔法反転障壁』を少女の周りに張りめぐらせます。

これは3年間の修行期間時に創り出したオリジナルスペルのうちの1つで多重高密度魔法障壁に大量の魔力を流し密度を底上げし、障壁内で循環させることで外部からの魔法を強引に吸収し障壁に編みこんである反射魔法と増幅魔法カウンターによってその魔法を倍返しにするという極悪な障壁です。いつもは攻撃を受け流すように超高密度魔法障壁を薄く張るだけですが、何故か使う魔法を間違えてしまいました。

けっ決してわざとなんかじゃありませんよその小さな少女がエヴァンジェリンだとすぐに気づいたからなんてことは決してありません。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛らしいお嬢さん？」

周囲は木々に囲まれており気絶した魔法使いの集団たち以外には誰も居なさそうなのでそこにいる少女に声をかけます。

その姿はまさに満身創痍で、私は彼女が口を開く間も与えずに彼女を抱き上げすぐさま周囲を魔法で探り、見つかりにくいであろう場所に向かいます。

「えっ！あのっそのっ・・・キュウ／＼／」

彼女は少し慌てたようなくさをした後何故か気絶してしまいました。こんな状態ですからきつと疲れていたのだと思い、彼女が休めるように準備を始めます。まずは周囲に認識障害と人払いの結界を張り（もう魔具を使わなくても簡単に結界が使えるようになりました）ダイオラマ魔法球を取り出します。周囲に索敵の魔法をかけた後、少女と一緒に魔法球に入ります。

さて、彼女の目が覚めたらまずは説明しなければいけませんね・・・

ふと、目がさめる。

自分はベットに寝かされているようだ。身体を起こして傷の具合を確かめるともう完全に治っていた。自分は何故こんなところで寝ているのだろうかを考える。あの変な集団に襲われてからの記憶がはつきりしない

コンコンッ

「っ!?!」

すぐさま起き上がり周囲を確認してすぐ身動き出せるように身構える。すると、黒髪の十代後半ぐらいのかっこいい男の人が料理を持って入ってくる。

「調子はどうですか？ほとんど治っていましたが傷は治療せて貰いましたけど、どこがおかしいと感じるところはありませんか？」

しばらくの間、声が出ない。その様子を見て男の人は慌てた様子で

「どこがおかしいところがあつたんですか？すぐに見せてください  
「!」

と言ってきた。しばらく放心していた私だが、倒れる直前のことを

思い出し顔が熱くなっていることを自覚しながら肝心なことを聞く。

「助けてくれたのか？」

少し警戒しながらこの数年で身につけた少し威圧するような口調で彼に問う。

「そうですね。まずはこれを食べてください。お腹が空いているでしょう？本当は服も用意したかったのですが、女物の服なんて持っているわけがないので・・・」

その言葉に警戒を少し強める。なぜ見ず知らずの自分にこんなに優しくしてくれているのか判らない上に傷が治るところを見られたのだ。しかもそれを気味悪がるわけでも無く私に話しかけてくる。本来ならすぐに逃げ出すところだが此処は彼の家のように、私はこのことは全くわからないし何処に逃げればいいのかもわからない。そして一番の理由は逃げたとしても逃げ切ることはできないからだ。どんな方法を使ったのかは知らないが私を追ってきた人たちを一瞬で倒してしまふほどの人なのだから、私が逃げ切れるわけが無い。だから私は彼から少しでも情報を聞き出そうと彼に話しかける。

「ここはどこだ？」

「私の所有している別荘ですよ。ああ、自己紹介を忘れていました。私の名前はリゲルといいます。化け物どうし仲良くしてもらえると嬉しいです。真祖の吸血鬼エヴァンジェリン？」

一気に警戒を最大にして彼の動きから目を離さない。少しでも油断しないように、彼が油断した瞬間に全力で逃げられるようにしつつ、気になることを言った彼に問う。

「確かに私は吸血鬼だ。だが真祖とはどうゆう意味だ？そして何故名前を知っている！」

「そのままの意味ですよ。あなたは真祖の吸血鬼、ハイデライトウォーカーですよ。でなければ吸血鬼がこの日差しの中で十分に動けるわけが無いでしょう？何故名前を知っているのかというとななを探していたからですよ。」

たしかに、この身体になった頃は大変だったが今はもう大丈夫だ。この男は本当のことを言っているのだと判断して少しだけ警戒を緩める。だが、まだ聞きたいことはある。質問には答えてくれるようだからじっくり聞いてみるとしよう……

## リゲルSIDE

あれから彼女はあらゆることを聞いてきた。できる限りのことは答えたが、「何故私を知っているのか」と「お前が化け物というのはどういう意味だ」という質問には嘘を答えた。この二つの質問

は今答えるべきではないと判断したからだ。そして質問の嵐が終わった後、彼女は少しは警戒を解いてくれたのか先ほどのような口調ではなく見た目相応の口調で

「助けてくれてありがとう。あと、食事もありがとう。」

と言って、私が作ってきた料理を食べ始めた。そして彼女が食べ終わる時間を考えながら紅茶を入れる。

「はいどうぞ。食後のお茶です。」

「あっありがとう／＼／」

でも何故だか先ほどから彼女は目を合わせてくれません。何故でしょう？

「あっあのう・・・」

「はい、なんですか？」

そんなことを考えていると彼女が話しかけてくれました。

「よかったらなんですけど、わっ私のことを・・・そのっ・・・えっエヴァって呼んでくれませんか？／＼／」

---

えヴァあのターン



エヴァはなみだめ＋うわめづかいであいしょうでよぶようにゆっき  
ゆうしてきた

ゆうきはりせいがほづかいしそつだ。こづかはばつぐんだ！！

りげるのターン

りげるはすぐさまよつきゆうをのんだ。

りげるはエヴァのえがおをかくとくした！

---

その後私は彼女をエヴァと呼び、エヴァは私のことをリゲルと呼ぶ  
ことが決まりました。

「ごほんっ、それではエヴァに大切な話があります。これから話す  
ことはこの世界の最大の秘密のひとつであり今後エヴァが生きてい  
く上で必ず関わることになるもの話です。聞いてくれますか？」

「うん。それはさっきの人たちのこと？」

「そうです。彼らが使っていたモノの正体は魔法でそれを使う彼らは魔法使いです。そして私も彼らと同じ魔法使いです。ですが私はエヴァの味方ですから安心してください。ここまではいいですか？ それでは説明を続けますね。まずは、魔法のことを説明します。そもそも魔法というものは……」

そして私はエヴァに魔法のこと、魔法世界のこと、既にエヴァが魔法世界で賞金首になっているだろっことを説明した。

「そして何故私がある」エヴァ！……エヴァを探していたかと言っと、エヴァが身を護れるだけの力をつけさせるためです。私も化物物ですから、力の無い化物物がどうなるかは簡単に想像が付きます。先に言うっておきますがこれは強制ではありませんし、私に護って欲しいと言うならそれでもいいのですがいつまでも護り続けると言うことには無理があります。なので私は、魔法を教えたいと思っっています。エヴァはどうしたいですか？」

エヴァは少し考えるような仕草を見せた後まっすぐに私の目を見て

「私に魔法を教えてください。」

と言ってくれました。だから私は、まず魔法の危険性と本質を教えに行きました……

## エヴァンジェリンSIDE

「エヴァはどうしたいですか？」

そう聞かれたとき私は迷った。新しい力、大きな力を手に入れると  
言うことは利点もあれば欠点もある。これは自分自身が体験してき  
たことだからいやと言うほどわかる。力をつければ今の敵には勝つ  
ことはできるかもしれないが、より多くの強い敵を呼び寄せること  
になる。それに比べて強い彼に護ってもらえるという案はとても魅  
力的だった。彼は強いから負けることは無いと思うし、最低でも逃  
げ切るくらいはできると思う。そして、彼と一緒にいられる。  
だがそこで私は重要なことに気が付く。私が彼の足を引っ張ってそ  
のせいで、彼が私を庇って怪我をしてしまうかもしれない。  
そんなことは耐えられない！護ってもらって、こんなに優しくして  
くれている彼に迷惑をかけ続けるなんてことはしたくない！それに  
いつまでも荷物のままじゃ彼と対等にいられない。そう思った私は  
新たな決意を胸に彼の瞳をまっすぐに見つめる。

「私に魔法を教えてください。」

絶対に強くなるんだ という決意を胸に彼の話を聞く。今はまだ  
届かなくてもいつか彼の隣に堂々と立っていられるように、立って  
いる女ひとが自分であるために。そしてこの気持ちをいつか彼に……

.

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2) (後書き)

リゲル(主人公)は決してロリコンではありません。エヴァは一応合法ロリです。だから今はまだ手は出していないかもしれませんがもし出したとしても大丈夫なんです！もし駄目でも可愛すぎるエヴァが悪いんです！そうに違いがありません！

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3) (前書き)

お詫び

遅れました

投稿する直前全てが消えてしまいました。

思い出して書いてみました。

短いです。本当に申し訳ない

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3)

リゲルSIDE

エヴァと会ってから数年経ちました。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック『氷の精霊21頭。集い来たりて敵を切り裂け！ 魔法の射手・連弾・氷の21矢』！」

「その程度じゃ掠りもしませんよ？」

私は今、エヴァと1日に1回の模擬戦をしているところです。これはエヴァに戦闘経験を積ませる為であると同時に、私が修行の成果を見極めこれから何処を鍛えるのかを見極めるためでもあります。エヴァに戦い方を教えるに当たって、私は魔法だけでなく体術も同じように教えてきました。なぜなら魔法が使えない場所もありますし、魔法発動媒体をとられたりその他の使えない状態に陥ったときに身体ひとつである程度戦えないと困ると言う自分の経験から、両方を教えることにしました。

「戦闘中に考えることなんて余裕だな？ハア！」

そう言いながら、エヴァは蹴りからの突きを放ってきます。私はそ

れをかわし、捌きます。

「そんなことないですよ？最近は少し危ない時も増えてきてますし技も魔法も上達していますよ。」

エヴァと修行し始めてから魔法球を使用していたので実質50年ほど経っています。もう既に私が今まで戦ってきた人たちが束になっても片手で叩きのめすことができるほど彼女は強くなったと思います。

その間にも、エヴァを狙った襲撃は絶えることがありませんでした。なのでその人たちはエヴァの経験の糧になってもらいました。その時エヴァに、殺すつもりで向かってきたものの恐ろしさを知ってもらいました。そして相手を殺すということも経験してもらいました。でないと私がいなくなったときにすぐに殺されてしまうかもしれない。それほどにまで殺す覚悟の有無は勝敗に関わってくるのです。でも50年ほどそんな生活をしていたせいでしょうか？最近エヴァの口調が威圧的になってきました。もしかすると反抗期でしょうか？そうならとても寂しいです。

「ッ！（模擬戦中にそんな顔をするな！／＼／＼）・・・ふ、フンッ！いくぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪 闇の吹雪』！」

蹴りをかわした直後にエヴァが魔法を放ってきますが、虚空瞬動で



かわします。そして即座に魔法を放ちます。

「まだ修行が足りませんよ？」 紅き焰 『』

「チィ！」 氷楯 『！』

エヴァは魔法をつかって防ぎますが、一瞬私のことを見失った隙にエヴァに手刀を突きつけ、模擬戦の終了を宣言します。

「はい、では此処までです。大分強くなってきましたね。」

「私の攻撃は掠りもしない癖して良くそんなことが言えるな？」

でもエヴァは本当に強くなりました。本人はあまり自覚していないようですが、もう十分に最強レベルに到達しています。後エヴァに足りないものは経験だけです。もう私が教えられることはほとんどありません。

だから、そろそろお別れです。

「どうしたんだ？大丈夫か？」

少し考え込んでいたみたいですね。表情に出てしまったのかエヴァ

が心配してくれませう。口調は変わっても優しいところは変わらないので嬉しいです。

「いえ少し今後の修行ことを考えていました。で、そのことなのですが、テストをしたいと思います。」

「テストか？今回は何をやるんだ？」

今までもテストは時々やっていました。どこどこの盗賊団を倒せだとか、龍を一匹倒して来いとかですが。いつのまにか毎回ご褒美を上げると言うルールができてしまいましたがそれは別にいいでしょう。

このテストが終わったら全てを話して私は元の時代に帰ります。だから最後に弟子の成長を見ておきたいのです。最初は理不尽な力に屈して欲しくないと思って鍛えていました、ですが今では家族も同然です。離れるのは悲しいですが、それも彼女の糧になるでしょう。もともとそのつもりだったはずですよ。

「明後日メガロメセンブリアで行われる剣闘大会に参加して優勝してくる」それがテストの内容です。これは一人で行ってもらいます。私はここで待っていますから、しっかり優勝してきてくださいね？」

「案外簡単だな？てつきり龍の巣でも壊して来いとも言われるかと思っただぞ？」

「そんなことはしませんよ、龍が可愛いそうですし。エヴァも簡単にお金が稼げるのでこちらのほうがいいでしょう？じゃあ、晩御飯にしますから、お風呂に入ってきてください。」

「テストの後のご褒美を楽しみにしてるぞ？あと、晩御飯は肉の気分だ。」

「はいはい、わかりました。今日はローストビーフにでもしましょうか？」

今日はいつもより腕によりをかけて作りましょう。

---

## エヴァンジェリンSIDE

私は食事の後ベットに潜り込んで考え事をしていた。少し彼の様子

がおかしかった気がするからだ。ほんの少しだけ但实际上にそう感じたのだ。この50年間、いつも二人で過ごしてきたからこそ気づくことができた本の小さな違和感だが、何故か気になって仕方が無い。そんなことを考えていると

ガチャ

部屋の扉を開けて彼が入って来る。

「今日もですか？自分の部屋があるんですからそこで寝ればいいでしょう？」

「別にいいだろう／＼私が勝ち取った権利だ！それにリゲルもいいと言っただろう？」

「あれはそう言わなかったらエヴァが泣きそうだったからでしょう？あれはズルいです。」

「リゲルも何でもいいといったくせに嫌だと言っからじゃないか！」

「それもエヴァが泣きそうになりながら言ってきたからでしょう？」

「うるさい！／＼いつまでも昔のことをいう男はもてないぞ！」

「別に好きな人が居る訳でも、誰かに好かれている訳でもないですよ。ようから別にいいですよ。」

流石に少し頭にくる。多分コイツは私のことを妹の様にしか見ていないのだろう。よく考えればわかることだ。こうやって私が何を言ってもすぐに言い返してくる。

でも私はそんなところでは満足できない。妹なんかじゃくて、私は・

「エヴァ、ボーっとしてないでもう少し詰めて下さい。流石に少し狭いですよ。」

「……はあ」

時々心が折れそうになる。まあ、こんなものだから他の虫が付く心配が無いのだが、このままじゃいつまで経っても妹のまま……そのうち誰かがこの朴念仁の魅力に気づいてしまいかも知れない。そしていつかその誰かと結ばれて、私を措いていつてしまいかもしれない。そんなことは耐えられない。

だから今度のテストのご褒美はもう決めてある。このテストが終わったら、この気持ちを伝えてその答えを貰うんだ！



第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3) (後書き)

本当は二話投稿する予定でしたが、時間の問題と一回消えてしまったことよる精神的ダメージで1話だけになりました。  
次回はお別れです。

よるしい、ならばアンケートだ(前書き)

ヒロインアンケート&それに伴うアーティファクト募集



## よろしい、ならばアンケートだ

作者のミケと申します。

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ の連載を初めて6日が経ちました。いい案が浮かばなかったり、感想をはじめてもらって喜んだり、昨日自分の最高傑作だと思っ た第九話が投稿直前に消えてしまったりいろいろなことがありました。

さて、大分話は変わりますが、ただ今この駄文の状況は  
累計PV67,174アクセス ユニーク10,837人 総合評  
価493pt・・・

正直ビックリです。私の駄文がここまで読んでもらえるとは思って  
いませんでした。

なので皆さんには、心からの感謝を ありがとうございます。

さてさて、皆さんお解かりだと思いますがアンケートです。

エヴァはもう決定です。これは、最初から決まっていたので、外せ  
ません。なので、エヴァいがいの人を入れるのなら、ハーレムにす  
るつもりです。

そこでアンケートです。

1つ目はハーレムにするのかということ

2つ目は誰をヒロインにしたいかということ

3つ目は全く関係ありませんがアーティファクト案募集

この3つのことについてアンケートをします。書き方はお任せしますので好きなように書いてください。

感想からでも、活動報告のコメントからでもOKです。でもちゃんと判る様にしてくださいね？

3つ全部書く必要もありませんから気軽にお願いします。

たくさんの人たちからのご意見をまっけてます〜！

よるしい、ならばアンケートだ（後書き）

（予告）

今日中に最低1話投稿します

## お知らせ（前書き）

アンケート報告

ハーレムあり8ハーレムなし3

ヒロイン

マナ3、月映2、このか2、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか2、月詠1、茶々丸4、千雨1、くーふえ1、アスナ8、アキラ1、さよ1、刹那1

アーティファクト

猫っぽい奴（化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか）

黒猫関係（ハーデイス？もしくは夜一？）

ってな感じです。今後も募集します。

## お知らせ

今回は、少しお知らせがあります。

先に謝ります。ゴメンナサイ！

さて、何故謝ったのかと言うと

今日は原作知識が30巻ぐらいまでだったので今日友人宅で最新まで読んできました（何だ今まで読んでいなかったのか？とか言わないで下さい）。そして作者は気づきました。エヴァのくだりが原作から遠過ぎることに……

修正しきれませんやヴァイです。やっちまっています。

これはあれです。偽の記憶が入れられていたことにしましょう、そうしましょう。異論は認められません（それ以外は作者がとても苦しみます）。そしてエヴァの強さとラカンのバグぐあいを再確認しました……学園長って本当に強かったんですね……  
フェイトがいい奴になってます。彼を傷つけられそうにありません。

っということがあり今の状態だと進めることができません。一応どうにかできますが酷いことになるのは目に見えているため、少しお休みします。それに今後がわからないとまた修正することになりそうです怖いんです。

内容を練り直して修正していきますが、一日一回の投稿は守れそうにもありません。

今後の原作の進み方によります。

気長に待っていてください

今現在、借りてきたものを読んで構想中です

お知らせ (後書き)

まだ此処の作品を辞めるつもりはありません、修正期間をいただくだけです。

T O B E C O N T I N U E . . . .

**第8話 よろしい、ならばまた会う日まで (前書き)**

一日かけて修正案を出し、なんだかんだしてたら・・・書けちゃった・・・

無理やり感が大きいですかね？

いくぞ読者ーーーー (作者に対する) 優しさの貯蔵は十分か？

今日はfateの映画も見えました)

## 第8話 よろしい、ならばまた会う日まで

リゲルSIDE

翌朝エヴァがメガロメセンブリアに旅立った後、ゆつくりと準備を始めた。今住んでいる場所はメガロのはずれにある山奥のログハウスであるから、エヴァが戻ってくるのは早くても明日の朝だろう。まず私は手紙を書いたための魔具の準備をした。

この魔具はビデオカメラのようなもので撮った映像を空中に投影するものである。

そこにエヴァへのメッセージと彼女の為に造った幾つかの魔具を残して私は再びベテルギウスを使った。

「さようなら。また600年後に会いましょう。」

エヴァンジェリンSIDE

私は朝は早くに家を出てメガロメセンブリアに行きさつさとテストをこなし、優勝賞金を持って彼の待つ家に急いで帰った。そして家に着いたのが、翌朝の四時ごろだったことから相当早く帰ってきたことがわかる。



この時間なら彼も寝ているだろうからベットに潜りこんで一緒に寝ようと思えば彼の部屋に入る……

でもそこに彼の姿は無く、ベットの上には「この魔具に魔力を流せ」と書かれた紙といくつかの魔具が残されていた。

そうして私は手紙に書かれていたように丸い宝石のような魔具に魔力を流した。

そしてこれがあの時感じたほんの少しの違和感の正体だったのだと気づくには、とても遅すぎた……

「エヴァ、おかえりなさい。そしてごめんなさい。」

映し出された彼からの第一声はおかえりなさいと謝罪だった。

そして映し出された彼から聞かされたのは、自分は未来から来たこと、いつかまた会えるはずだと言ったことだった。

これだけでも、十分おかしくなってしまうそうなことだったがそれにはまだ続きがあった。

それは私という存在の根幹を揺るがすほどのことだった。

彼が話したのは、吸血鬼化と私にかけられた魔法についてだった。

まず私は完全に吸血鬼になっているため、もう人間に戻ることはできないと言ったこと、これはもう覚悟していたし彼が未来から来たことと不老不死であるから後から考えると良かったともいえるのかもしれない。

だがもうひとつは違った。彼は私の記憶が偽者だと言った。そして彼はここにある魔具の内の1つはそれを解くための物であることとその使い方を教えてくれた。

そして私はそれに魔力を流す。魔具は彼以外が使うことを想定されていなかったため、他人が使うには大量の魔力が必要になる。手が震

えてるのがわかるが、より強く魔具を握り締めて押さえつける。  
私はこの数年で身体も心も強くなった。だから彼はこのことを教え  
てくれたのだと思う。  
私はそんなことを考えつつ魔力が根こそぎ削られていく虚脱感を感じ  
ながらそれを起動させた……

私はとある国の皇女で、どこぞの領主の城に預けられ何不自由なく  
暮らしていた。

そのころの私はまだ人間だった。  
だが私は10歳の誕生日の朝、目が覚めた時にはすでにこの体だっ  
た。

そして私はあらゆるものを憎み、神を呪いながら私をこんな姿にし  
たあの男へ復讐を果たし城を出た……

私は全てを思い出した。そして自分の記憶が偽りだったことがわか  
り混乱している中考える。

おかしいのだ、1つだけわからないことがある。私は復讐を果たし  
た後、すぐに城を出たはずだ。

そしてそのまま時が過ぎて彼と出会った。

ならこの魔法は何時かけられた？城を出たときか？それとも彼に会  
うまでの期間にかけられたのか？彼がかけたというのは無いと思う



第8話 よろしい、ならばまた会う日まで (後書き)

こんな感じでどうでしょうか？

どうにか修正できたとは思うんですけど・・・

感想お願いします！そしてアンケートにご協力お願いします。

アンケート報告

ハーレムあり10ハーレムなし3

ヒロイン

マナ3、月映2、このか4、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか

3、月詠1、茶々丸4、千雨1、くーふえ1、アスナ4、アキラ2、

さよ1、刹那3

アーティファクト

猫っぽい奴(化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか)

黒猫関係(ハーデイス？もしくは夜ー？)

エヴァの魔具

映像投影型魔具

記憶封印解除用魔具

e t c.....

## 大戦期時のステータス（前書き）

次回から大戦期にはいるかも・・・  
その前に現時点のステータス

## 大戦期時のステータス

名前 リゲル・マクダウエル（こうした方が何かと便利だった為）

性別 男

年齢 53歳（ダイオラマを含めて）

種族 古猫

容姿 人VER 十人中八人がかっこいいと言う容姿（BLACK CATのトレイン＝ハートネット） 肉体変化によって5〜20歳頃まで変更可能

猫VER 黒猫

性格 優しい 無口だが心の中ではしっかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感 基本は丁寧語ではなす

正義の魔法使いは嫌い

能力値（Fate風）「」は猫時、

筋力S+ 「A+」

耐久S+ 「S」

敏捷S+ 「EX」

魔力EX

気 EX

幸運S（アルスの加護）

能力

名称 魔具創造（アイテムメーカー）

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともEXなので気にせず使えるが、一回の使用にこのかの最大魔力の30%近く必要である。（魔道具によって変化）

名称 自己流体術

効果 自己流で覚えた体術。完成を使つてあらゆる体術のいい所を抽出してある。

名称 武器使い

効果 あらゆる武器を使いこなす（完成による。）

名称 家事万能

効果 エヴァとの生活で覚えた。完成により全てにおいて超一流。

名称 気配探知

効果 エヴァとの生活で覚えた。半径30キロメートル圏内の全てが手に取るようにわかる。

名称 並列思考

効果 エヴァとの模擬戦中に覚えた。完成により、いくらでも並列思考ができる。

名称 無詠唱

効果 魔法を詠唱なしで使える。詠唱時と比べても威力は落ちない。

名称 神からの贈り物（ギフト）

効果 いろいろな能力を神様が（勝手に）贈った

名前をもらったことも関係しており、さまざまな効果が得られる。

名称 肉体変化（にくたいへんか）

効果 神からの贈り物。アルスの「年老いた姿は見たくない」と言うわがままから付与された能力

名称 猫化（ねこか）

効果 神からの贈り物。アルスの「ねこ耳でおそろい／＼／＼」と言うわがままから付与された能力

完全な猫化から人の状態にねこ耳、尻尾、猫の手足などに変化することができる

名称 完成（ジ・エンド）

効果 神からの贈り物。めだかな物語のアレと同じ能力

名称 不老不死

効果 寿命で死ぬことが無くなる。驚異的な回復能力を有する。

e t c ……

アーティファクト（まだパクティオーしてない）

名称 ??????????

効果 ??????????

---

名前 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

性別 女

年齢 700歳以上（ダイオラマを含めて）

種族 真祖の吸血鬼



容姿 書かなくてもわかるでしょう？  
性格 書かなくてもわかるでしょう？

能力値 (F a t e 風)

筋力 A

耐久 C +

敏捷 A +

魔力 A ++

気 ?

幸運 B

能力

名称 真祖の吸血鬼 (不老不死)

効果 弱点を克服した吸血鬼であり吸血鬼の最高峰。寿命で死ぬことが無くなり驚異的な回復能力を有する。だが肉体の成長も止まるので、エターナルロリータになってしまった。

名称 リゲル流体術

効果 リゲル直伝の体術。並みの魔法使いならいくら束になって襲い掛かってきても片手で倒すことができる。

名称 闇の魔法

効果 リゲルと別れてから生み出したオリジナルスぺル。魔法を自身の体に取り込む事で全ての能力を強化する。

名称 合気鉄扇術

効果 チンチクリンなオッサンに習った体術。

名称 人形使い

効果 人形を操ることに長けている。これに伴い糸術も使いこなせる。

名称 氷属性無詠唱

効果 氷属性のみ魔法を詠唱なしで使える。詠唱時と比べても威力は落ちない。

e t c ……

保有魔具

映像投影型魔具

記憶封印解除用魔具

e t c ……

アーティファクト（まだパクティオーしてない）

名称 ??????????

効果 ??????????

## 大戦期時のステータス（後書き）

今日中にもう一話いけるかなあ？  
かぜで寝込んでるから厳しいかも？

## 第9話 よろしい、ならば旅立ちだ（前書き）

感想お願いします！そしてアンケートにご協力お願いします。

アンケート報告

ハーレムあり11 ハーレムなし3

ヒロイン

マナ4、月映2、このか4、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか3、月詠1、茶々丸5、千雨1、くーふえ1、アスナ4、アキラ2、さよ1、刹那3、千鶴1

アーティファクト

猫っぽい奴（化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか）

黒猫関係（ハーデイス？もしくは夜一？）

アーティファクトはハーデイス（魔改造ver）で決まりかなあ？  
まあ、魔具つかえば他に考えてるのもどうにかなるかな？

ヒロインは茶々丸、マナ、このか、アスナあたりで決まりかなあ？  
でも、このちゃんはせつちゃんとペアで考えないとだから・・・

まだまだ募集してます！



## 第9話 よろしい、ならば旅立ちだ

### エヴァンジェリンSIDE

彼が居なくなつてからもう600年以上たった。今思い返すとあのときの私は酷かった。あの子の数年間、頭の中にはいつも彼の顔が浮かんでいて、立ち直ることができなくて、襲撃してきた魔法使いはいつも皆殺しにしてきた。殺さなければ私が殺されていたらうしな。

その後は殺さなければ生きられない時代もあったし殺さずにすむ数十年もあった。南洋の孤島に居を構えて人と交わらずに彼から教わった技と自分の力を磨き続けていた頃もあった。(この時に闇の魔法と人形使い開発した)

その頃は既に私も落ち着いていて、むしろ彼にまた会う時まで自分を磨き続けて彼をぶん殴ってやるんだ!と意気込んでいた。

そんなことをしていたらもうこんなにも経っていた。だけど彼は見つからない。十年ほど前から、私は自分の技を磨きつつ彼の搜索も始めているが、全く成果が無い。

いつかまた会えるといった彼の言葉を信じて探し続けてきた私は、連合の辺境のとある街に立ち寄っていた。

「おいつ、聞いたかよ？メガ口の拳闘大会で優勝候補だった\*\*\*  
\*\*\*が、やられたんだってよ！」

「マジかよ！最近ラカンさんが出てないから今回はあいつが優勝候補筆頭だったんじゃないかねえのか？誰にやられたんだ？」

「それがよお最近出てきた奴でさあ、その戦いがえげつないんだよ。相手の技をそっくりそのまま返すんだ。普通なら物まねなんてして勝てるわけ無いだろ？でもそいつ、おんなじ技使ってるのに使ってた本人よりも強えんだよ！」

「そいつなら俺も知ってるぞ。優勝賞金そっくりそのまま紛争地帯近くの村に配って回ってるんだってさ。そこら辺じゃあ『癒し手』<sup>ヒーラー</sup>って呼ばれてて、けが人を無償で治してるらしいぞ？何かたちの悪い魔法使いには追われてて、賞金もついてるらしいんだけどそこからへんの村じゃあ神様扱いで宗教までできてるんだと。」

「魔法使いの間じゃ『黒の抹殺者』<sup>ダークキレイザー</sup>、『死を運ぶ黒猫』<sup>ヘルキャット</sup>、『無音の掃除屋』<sup>シロテス</sup>、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』<sup>サイレ</sup>って呼ばれてるって聞いたぜ？」

「物好きな奴の居るもんだなあ？俺ならその金で遊びまくってやる

けどな！」

「俺たちなんかとは格が違うんじゃないか？」

「……そりゃあ〜ちげえねえ！！！！」

大口を開けてガハハハと大笑いしながら男たちが隣を通り抜けていく。私はいちばん手前にいた男の手をつかむ。

「何だい？お嬢ちゃん？何か俺に用事でもあるのかい？」

人当たりのよさそうな笑顔を私に向けながら、私に話しかけてくる。この男は善良な人だったのだろう、悪事に手を汚さなかったのだろう、こんな小さい少女にも優しくすることができただから。ただ不運だったのは、彼女にいちばん近い位置に彼がいたこと、たったそれだけのことだろう。

「すまないがその話、チヨットクワシクキカセテモラエナイカナア？」

その日の夕方、とある裏路地で身体を震わせている男たちが発見された。

後日、男たちは震えながらこう語った。



「あれは魔王よりももっともつと恐ろしい笑顔<sup>もの</sup>だった」と・・・  
その内の一人が、新しい扉を開けてしまったのはまた別の話。（決して語らないよ！「振りじゃなくてマジで」）

そして彼女の人形は彼らにこう言った

「サイナンドッタナア、ケケケツ！」

---

## リゲルSIDE

「ふ〜、やっぱり自宅は落ち着きますねえ〜。」

本当はほとんど経ってないが数十年ぶりにこの時代に帰ってきた私は、近くの村にある私の家のうちの1つでゆっくりしていた。なぜ家のうちの1つといったのかと言うと、各村を巡って治療していた私は、一箇所にとどまり続けるというのはどうしても難しかった。そのことを知った各村の人たちが治療しやすいようにという意味と

お礼を兼ねて私に造ってくれたのがこれらの治療場兼家である。今は紛争も落ち着いていて、けが人も出ていない。孤児院のお金もまだ十分に渡してあるから急いであることは何も無い。それに近くには魔法使いらしき気配もない為、ゆっくりくつろぐ事ができていた。もし何かあっても各村にいる自警団の人たちには、非常用の通信装置も渡してあるし、それが壊れたりしたらすぐに判るようになっているから安心だ。

「そろそろですかね？」

そしてわたしは今、此処を出ようと考えている。ここはもう十分やっつけていける。近くの村同士が協力し合っているし、私の活動に賛同してくれている「正義の魔法使い」ではない魔法使いたちもあわせて数十人ほど各街村にいる。

そう考えた私は、ここら一帯を彼らに任せ旅に出ようと思う。

エヴァも探さなきゃいけないし、ナギたちにも合流するつもりだ。オステイア崩落による被害もどうにかして食い止めるつもりだし、魔法世界自体の崩壊に対する準備もしなくてはいけない。ここに留まり続けているわけにはいけないのだ。

「さて、まずはみんなに話さなくては・・・」

私は各村に繋がる通信機を使って話したいことがあるという旨を伝え、集会場がある村の中心へと向かった・・・

近くの村の代表が集まり、遠くの村の代表は通信機越しで集会の準備が終わった後、私は今後のことについて話していった。

勿論始めは引き止められたが、私の決意が固いと判るとすぐにわかってくれた。

いつかはこうなるだろうと覚悟していただろうし、何時までも自立しないわけにもいかないこともわかっていたんだと思う。皆に「今までありがとう」と感謝を伝えその場は少し湿っぽくなったが、その後は街ぐるみで夜遅くまで宴会をした。

翌日にはもう村に彼の姿は無かった。

こうして彼は住み慣れた村を離れ、戦争の渦の中心へ向かっていった……



という疑問を抱かせた後、上機嫌で村を去っていったとさ……

**第9話 よろしい、ならば旅立ちだ (後書き)**

こんな感じでどうでしょうか？

感想、アンケート募集中です！

第10話 よろしい、ならば・・・なっ何だお前は！これは私のしごとがぶっ

サブタイトルが幼女により占領されたため、作者は逃亡しました・・・

11/08改定

流石にはじめてを奪われるのは無いだろうと思いなおしなしました。

第10話 よろしい、ならば・・・ なっ何だお前は！これは私のしごとがぶっ

リゲルSIDE

村を出てから、1週間経ちました。私は『導きの長杖』ガイドランスを使いながら薬味父（まだ12、13歳頃）を探しています。とは言っても大戦が始まるまでにはまだ時間がありますから、通りがかった村々で病人を治療しながら向かっています。

そんなことをしているうちに旅に出て1週間目の夜を迎えました。周りには村は無いようなので今日は野宿です。まあ野宿といっても魔具『ログハウス』を使っているので安い宿よりは質は大分いいですし、常時魔法使い専用の人払い兼認識阻害魔法を使っているので襲われる心配もありません。（エヴァがリゲルを見つけれない要因）

その後、晩御飯を食べてお風呂に入って寝たわけです。

此処までは何の問題も無かったんです・・・

「もぞもぞ、ずりずり）はあはあ・・・寝顔お・・・ガマンし



ないとお．．．（すりすり）．．．こんなはずじゃあ．．．．．」

早朝、私の意識はゆっくり覚醒していきます。これはエヴァとの生活の中で身についたもので一年を通して4〜5時頃には目が覚めます。すぐに目が覚める訳ではないので、このときの私は大抵無防備です。少しうるさいだけじゃあ全く起きません。そう、例えば殺気や悪意、身の危険等を感じなければ．．．

「．．．はあはあ．．．もうう．．．はあはあ．．．ガマンがあ．．．ハアハア．．．デキナイヨオ（ジユルリ）」

ゾクッ！

それを感じた瞬間に私は私の上に乗っていたモノを突き飛ばし、ベツトから飛び起きてソレから離れます。動悸が治まらず嫌な汗が止まりません。今まで戦ってきた歴戦の剣闘士達全員から殺気を受けられてもこんなに動揺することは無いと思います。ソレほどにまで恐ろしかったんです。

私に向けられたこの強烈なまでの劣情が．．．

「ハアハアハア．．．エモノオハアハア．．．オモチカエリイ．．．ハアハア」

私の索敵魔法を難なく潜り抜け、尚且つ気づかれずにマウントポジ

シヨンを取る……

こんなことができるのはアイツしかいません。

本来なら直ぐにでも殴りかかるところですが今のアイツは捕食者ヘンタイです。戦いを挑んだら確実に負けます。

そして哀れな獲物わたしは食べられて（性的な意味で）お持ち帰り（神界で監禁生活）されるでしょう。

私は『生きたい』という一心で無意識に気と魔力を融合させ、咸卦かんか法ほうを使用していました！

今まで使う必要も無かった上に見たこともなかったのですが、此処に来て生存本能が呼び覚まされたのか、最大出力（無限の魔力と気）状態で咸卦法を維持しながらヤツと対峙しています。

勝つことは考えていません！今するべきことはヤツの弱点を探しそこを突くことでショック療法的に正気を取り戻させることです！

「モオガマンデキナイイ〜〜〜！オモチカエリイ〜〜〜！！！！！」

ヤツは既に臨戦態勢をとっている！そして捕食者は襲い掛かった来た！……！！

ほしよくしゃ（ヤ）のしつげき！

ほしよくしゃ（へんたい）はりげるがさっちできないほどのはやみでちかついた。

りげるはしょうめんからだきあつようにほばくされてしまった。

いきなりぜったいぜつめいだー！

りげるはにげるためにもがいた！だが、よりみっちゃくしてしまっ  
たー！

ほしよくしゃ（ようじょ）はよりみっちゃくしたせいか、もっとこ  
うふんした。

いきがどんだんあらくなってくる！

そして、かおをじょじょにちかづけてくる。

りげるはぜんしんぜんれいをつかってもがいた！  
だかにげられないー！

ほしよくしゃ（だめがみ）はもっとことうふんしたー！  
どんだんかおがちかづいてくるー！

りげるはひっしにもがいたー！ー！

……だが

もう……にげられない……

ほしょくしゃ（いちず）のくちびるとりげのくちびるがかさなつた！！

りげるのくちのなががしめったなまあたかいものにじゅっりんされる

りげるのめのまえがまっくらになった……

「アーーーーッーーーーッ」

（見せられないよッ……！）

てれれれっつてっつてー！！

りげるはふぁーすときすをつばわれた！りげるはせかんどきすもつばわれた！

りげるはばくていおーにせいごう)？(した！かみのじゅうしゃになつた！

りげるはけいやくしゃかーど)きんいろ(をてにいれた！

りげるはしょうごう)つきめがみのこうけいしゃ』をてにいれた！

こういにより、たましいのかくがあたり、かみになつた！じんりよくをてにいれた！

かみになつたことで、しゅぞくが』こねこ』かみねこ』にしんかした！

じょうじてんかいがたあーていふあくと』こんじきのすず』をてにいれた！(くるねこのとれいんのくびもとさんしょう)

ばくていおーにより、ようじょからじんりよくがきょつきゆつたれることになつた！

じんりよくにより、まぐそつぞう まじんぐそつぞう にしんかした！

ねこけいのたましいそつぞうができるようになった！

ね「けいのせいぶつをしえきできるようになった！ね「けいのせいぶつからつやまわれるようになった！

うんよくかみはしょうきにもどった！！！

りげるは「ころにきずをおった！！

かみはじぶんのしでかしたことにきがついた！！

---

(り)「……………シクシクシク」

(幼)「……………ダラダラダラ(汗)」

(り)「……………シクシク……………ギロリッ！

(幼)「ビクウッ！！！」

(り)「フンッ!.....シクシクシク」

(幼)「ガーン!!.....サラサラサラ(砂になっていく)」

(り)「シクシクシ.....すうすうすう(泣疲眠)」

(幼)「チラッチラッ.....ズーン!!(罪悪感)」

(り)「すうすうすう.....」

(幼)「ズーン.....(自己嫌悪)」

---

## アルスSIDE

やってしまいましたあ.....襲ってしまいましたあ.....

仕事がやっと片付いてえ、やっと休みが取れてえ、やっつと!彼に会うことができた反動+寝顔のせいなんです.....

悪いのはわかってますう。でも……ハウ／／……  
・ハッ！

彼が寝てから起きて止めるというまで土下座し続けてえ、彼が起きてからは一万の言葉を使って謝り続けてどうにか許してもらえました。

無理やりはだめですう、神様でも御法度ですう。最上級神から「直ぐに来るように！」とお呼びがかかっていますう……

減給＋謹慎は確定ですねえ……

\*\*\*\*\*

この後、神界で行われた会議で彼女が

「でも、はじめてはわたしがほしかったんですう！」

という発言をしたため、いくら彼女が準最上級神と言えど反省の色が薄く誰もフォローできず



減給、謹慎に加え、100年間の無償神界奉仕（あらゆる雑務を押し付けられる）が決定した。

「なっ何か大切なものが奪われた気がするぞ！！」

「ケケケツ！ナニイツテルンダ御主人？トウトウボケタカ？」

「……………」

第10話 よろしい、ならば・・・なっ何だお前は！これは私のしごとがぶっ

パクティオーのいい仕方の案が浮かばずにこんなものになってしまっ  
た・・・

アーティファクト案を投稿してくださった方々、ありがとうございます  
ました。今後の展開も考え、このような形にさせてもらいましたが  
案の幾つかは少し改造して作中で使用させていただくつもりです。

アンケート報告

ハーレムにします。

ヒロインは

決定

茶々丸、マナ、アスナ、このか、刹那

未定

テオドラ、のどか、千雨

刹那は決定するか迷いましたが、このちゃんとセットということ  
で決定しました。

テオドラは微妙なラインです。明日新作を投稿するまでに3票以上  
入れてくれというメッセージが届いた場合入れます。

## 第11話 よろしい、ならば再会だ（前書き）

前回、流石に初めてを奪われるのは駄目だろうと思い、セカンドまでにしました。

そこは駄目ですよね。勢いで書いてしまい後悔気味・・・

お詫びで今日は2話更新予定！！！！

皆様のご要望にお答えしてテオ様ヒロイン化しました！！

ヒロインは

エヴァ、茶々丸、マナ、アスナ、このか、刹那、テオドラ、千雨

の中からになります。この作品の方向性によって出す出さないと変わるかもしれませんが最大限努力したいです！！

## 第11話 よろしい、ならば再会だ

リゲルSIDE

先日、大切なものを奪われたりゲルです。寝起きを襲撃され、全く抵抗もできずに一方的に蹂躪されて心に大きな傷ができました。

でも、貞操は護りきました。(っえ？前回奪われたらって？前書きを読んでください。)

油断してたわけではないんです。確かに強くなってきた実感はあったので普通の状態ならいい勝負だったでしょう。

でもあれは格が違うんです。暴走状態は手がつけられないんです。某金ピカ王も真っ青なぐらい力の差を見せ付けられました。

……死んだらアイツの所に行くんですよ……絶対に死なないようにしましょう！不死なのでそう簡単には死には……って神様になったんですから余計死ななくなりましたよね。安心ですよ。神様相手にしてもいい勝負できますよね！神様になったから少しは強くなってますよね？(実際に強化されています。全てにおいて数段階以上)

けっ決して現実から目を逸らしているわけじゃありませんからねっ！あいつならまた来そうなんて思ってませんからねっ！(当分出す予定はありませんがまた出てくるでしょうね？ by 作者)

何かすごく嫌な予感がします。ヤツとはまた大切なものを賭けて戦うことになりそうですね……

なので今日からの目標はアイツに襲われても負けなくらいの強さ

を身に付けることです！光の速度を超えて見せますよ！主に逃げ切るために！！

さて、奪われてしまったのはしょうがないですし、あの後ものツごく誤ってもらった（あれ、なんかデジャビユ？）から、流石に許さないところちが悪いことしてるみたいになるんです。本当はこっちが100%被害者なのにね！・・・幼女・・・恐ろしい子っ！

そんな私の心の傷を癒すために久々に登場する『なかなか良いたらいい（木製+神力で強化済み）』！この中に猫状態（何だか毛並みが大分良くなってる）で入って、近くの小川をドンブラコと流れています。

なかなか落ち着くんですよ？これ。流れが強くなければなかなか昼寝にはいい感じなんです。このあたりの地理は理解しているので、このまま流れていても全く問題ありません。薬味（父）もこの川の下流のほうにいるみたいですし・・・

くるくる回転しながら流れる『なかなか良いたらいい（木製+神力で強化済み）』の縁にあごを乗せて景色を眺めながら川を下っていきます。普通なら目が廻るでしょうけど、そんなこと私には関係ありません。のんびりと目に映るものを眺め続けます。軽く鼻歌も歌ってご機嫌です。

山、川原、川、川原、林、川原、川、川原、山・・・  
山、川原、川、川原、エヴァ、林、川原、川、川原、山、川原、川、川原、エヴァ、林、川原、川、川原、山・・・

んん？見慣れた顔があつたような？

・ 山、川原、川、川原、エヴァ？、林、川原、川、川原、山……

いましたね、しかもこっちすごく見てますね。そんなに川を流れていく『なかなか良かったらい（木製＋神力で強化済み）IN猫』が珍しいのでしょうか？……

珍しいですよ〜そうですね。というかあれ、見ているというより睨んでません？もしかしてバレテマス？

「おい、その猫！」

話しかけてきましたよ！さてどうしましょう？なんかこのまま正体言つと殴られる気がするんですよ、主に彼女の右手の具合から考えるに。まあ、反応しないと酷そうですねからとりあえず鳴いときましよう。

「ミヤア〜オ？」

少し首をかしげるのが大事ですね。猫のときは大抵これで乗り切つてきました！駄目なら逃げれば良いだけですしね。

「御主人。ナンデネコナンカニハナシカケテンダ？」

「黙れチャチャゼロ。チツただの猫か。まあいい。」

そういつてエヴァは私の上まで飛んできて、「なかなか良かったらい（木製＋神力で強化済み）IN猫」を回収して川原に置きました。少しチャチャゼロが空気みたいですが今は気にしません。

「ふむ、なかなかいい毛並みをしてるな？少し触らせろ。」

そういつてエヴァは私を抱き上げる。まあ、触らせたら話してくれらるだろうと思って私は為すがままになっていたのですがこれがいけませんでした。エヴァが私を抱き上げた瞬間口をニヤリと歪ませて、そのまま私を川に放り投げてきたんです！ソレも思いつきり！全く警戒もしてなかったのでそのまま私は川の中へ

「ミギヤアアア~~~~！！！」

いきなりの事で上下がわからなくなった私は少し溺れてしまい、急いで人型に戻ります。服は常時展開型のアーティファクトである『このまじりの金色の鈴』に記憶してあるものを魔神具としてそのまま身体の表面に作り出します。

「ざまあみろリゲル！いきなり出て行った上に長年私を放置した罰だ！まだこの程度では許さんがな！！」

川は人型になれば浅いので、私は落ち着いて上半身を起こします。

「そのことは謝りますが、気づいていない振りをして川に投げ込むなんてひどくないですか？！」

「お前のほうがよっぽど酷いだろうが！いきなり一人になってしかも最低な置き土産置いてったくせに良くそんなことが言えるなあ？」

「それはゴメンナサイ。でもちゃんとメッセージは残しましたし、その中でも十分誠意を込めて謝罪したつもりなのですが……」  
その程度のことです！！！！「ッ！」

「その程度のことです許せるはずが無いだろう！お前がいなくなっただけの600年間私がどんな思いで生きてきたと思ってるんだ！さっさと寂しくて仕方なかったんだぞ！／＼／」

泣きそうになりながら必死に怒鳴ってくるエヴァを見ます。この顔で言われた時はいつも私の負けです。心の底ではエヴァを甘やかしてるんです。しょうがないんです、家族なんですから。血の繋がっていない家族ですからまた別の言い方になるのかもしれないがね。



「いいかエギル！ 今後は600年分私の言うこと聞けよ！ まだ貰ってないご褒美もあるんだからな！！／／／」

「はいはい、判りましたよお姫様。何なりとご命令を。」

少しエヴァをからかう様にワザと畏まった言い方をして、片膝を付いてエヴァの左手を取って軽くキスを試してみる。エヴァの顔が赤くなったから少しは効果があったのだろう。

「ええい、茶化すな！ お前は私を甘えさせてくれれば良いんだ！ それ以外のことはするな！！」

「畏まりました。お姫様。では、こちらへ。」

そういつて即座に魔神具で『ログハウス』を造り、エヴァと一緒に入っていった。その日はこの600年の月日を埋めるように彼女の話を聞きながら甘えさせ続けました。勿論、エヴァの座る場所は私の膝の上でしたよ？

第11話 よろしい、ならば再会だ（後書き）

もっとエヴァをデレさせたい!!!

いいでしょうか？

砂糖と蜂蜜ぶっ掛けまくりますよ？いい人は返事ください！

感想待ってます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0406y/>

---

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

2011年11月8日04時13分発行